

# 「絵の町・岩内」で美術文化を次世代に引き継ぐ

岩内町 NPO法人岩内美術振興協会

「みんなでつくる美術館」――。岩内町にある木田金次郎美術館はこの美術館の理念通りの印象を受ける。

木田金次郎は 1893（明治 26）年岩内町に生まれ、生涯にわたって故郷岩内で過ごし、岩内を一途に描き続けた北海道を代表する画家。青年期に有島武郎と運命的な出会いを果たし、2人の交流を小説にした『生れ出づる悩み』の主人公木本のモデル画家として知られるようになった。有島武郎の没後は、家業である漁業を捨て画家に専念。1954（昭和 29）年、61歳の時には洞爺丸台風による岩内大火で作品約 1600 点を焼失した。その直後から制作を再開して独自の画風を確立させ、道内外から高い評価を得た。1962 年に脳出血により逝去、享年 69 だった。

その木田作品を展示する木田金次郎美術館は、かつての国鉄「岩内駅」跡地の「いわないマリパーク」に建ち、館内には展示室のほかミュージアムシアターやティーラウンジ、日本海を望める展望回廊などが設けられている。

同館の運営を通じて地域の美術文化と教育の普及を目的に活動しているのが、1994 年 3 月に発足した「岩内美術振興協会」（以下振興協会）だ。2006 年 9 月からは指定管理者として美術館の運営を担い、2007 年 11 月

に NPO 法人化した。

この美術館が「みんなでつくり上げてきた」という印象を放っているのは、木田の作品を通じて岩内を広く知ってもらいたいという、町民有志の願いが実を結んだ美術館建設の歴史や振興協会の活動があるからだ。



国鉄「岩内駅」跡地の「いわないマリパーク」に建つ木田金次郎美術館

木田の没後 20 年となる 1982 年ころから青年会議所のメンバーを中心に美術館をつくらうという機運が盛り上がり、寄付を募るなどの美術館建設に向けた運動が始まった。その建設運動に岩内町が呼応し、開館当初から「町立民営」というユニークな体制で運営されていることも特筆すべきことだが、建設運動の過程で、岩内町と町民が協力して札幌圏や首都圏に向けた作品所在調査を行うなどして、油彩の収蔵作品 91 点の 6 割にあたる 50 点を所蔵者から預かる「寄託作品」として集め開館にこぎつけたことだ。

岩内大火により数多くの絵が焼失し、収蔵作品が極端に少ないことは明らかだったが、1軒1軒絵の所有者を訪ね絵を募っていった熱意や快く寄贈や寄託を快諾する人が多かったのはそれだけ木田が町民から愛され、美術館にかける町民の思いが強かったということの証だろう。

そして建設運動が実を結び、1994年9月の札幌でのプレビュー「木田金次郎」展開催を経て、11月3日に「木田金次郎美術館」が開館した。開館日には町民やファン300人が並ぶほどの熱気だった。開館から25年以上経ち、これまでに約44万人が来館している。

「絵の町・岩内」と言われるように岩内は多くの芸術家を育み、絵を飾る家も多いなどもともと絵を好む住民が多い土地柄ではあったにせよ、なぜ木田金次郎や美術館がこれほどまでに町民に愛され続けているのか。学芸員の岡部卓さんは木田のエピソードを交えてこう分析する。

「昭和初期、岩内の小学校教師たちを中心に、木田の指導を受けた人たちが、力試しに『道展』に応募したところ数多く入選し話題になりました。その後もその教師たちの教え子の中から画家が生まれたり、またその教え子たちが教師となり絵を指導した生徒の中か

らもデザイナーが出てきたりするなど人や地域を育ててきたこと。そしてそんな木田の息吹が明治から現在まで途切れることなく脈々と受け継がれていることが町の特徴の一つにもなっているからでは」

### ■ 教育普及事業にも力を入れる

同館では季節に応じて年3回展示替えを行うほか、岩内出身の画家や写真家、書道家の作品から地元の中高生の作品、鉄道写真など、岩内の町を彩る作品を幅広く展示し、町の魅力を内外に発信している。

収蔵作品は168点で開館時より77点も増えたことになるが、これは毎年数点ずつ寄贈や寄託があるためだ。これほど寄贈や寄託が続いているのは、画商が介在して作品を販売することなく、岩内の地縁や支援者を通じて作品が流通していた背景がある。絵の師につきず、どの会派にも属さなかったため“孤高の画家”と呼ばれる木田の、実は活発で多様な交流があった一面をうかがわせる。

作品の展示だけでなく様々な事業にも取り組んでいる。講演などを行う美術館講座も年4回開催しており、そのうち1回は木田が実際に描いた場所を町所有のバスで巡るツアーが定番となっている。ツアーの中でも好評だったのは、木田と交流のあった建築家の田上義也の建築探訪ツアーで、参加者が多く追

加のツアーが開催されたほどだ。

教育普及事業として、子どもたちの夏休みや冬休みを中心にワークショップを開催、岩内出身者で制作の世界で活躍する人や、岩内高校美術部員を講師に迎えた作品制作など多彩なプログラムを実施している。



木田金次郎作品の舞台を巡るツアーは人気だ

また、2015年春からは元岩内高校美術顧問の福田好孝先生を講師に迎え、「岩内絵画教室」を開始している。4歳から小学生までのこどもの部（半年で10回1500円※2020年4月から2000円）と中学生以上の一般の部（同5000円）を設け、初年度から人気で翌年からは各部2クラスずつとなり、現在は4歳から90歳代まで約80人が受講している。中にはニセコや函館から通う受講生も。2年目の2016年からは学びの成果を発表する場として「絵画教室作品展」も開催している。

今年で25回目を迎えた「ふるさとこども

美術展」では、小樽市を除く後志地域19町村の小中学生から作品を公募し、その中から一次審査を通過した作品を冬休み明けに展示・表彰している。始まった当初は応募数180点ほどだったが今では約1600点も集まり、後志を代表する公募展になっている。

個人美術館ならではのイベントも定期的に行っている。「木田金次郎生誕祭」では生誕日の7月16日に合わせて講演などを毎年開催。「どんざ忌」は木田の命日である12月15日に合わせて、献花や講話など木田を偲ぶ催しで、鍋を囲んでの交流会も行っている。

展示替えのたびに開催している「ナイトオープン」は、閉館後に展示の解説をしたり、ティーラウンジでスタッフが作る料理やお酒を味わったりしながら絵の鑑賞を楽しむと共に町民同士の交流を深める。

他の美術館とも連携しており、毎年夏休みに合わせて「しりべしミュージアムロード共同展」を後志の4つの館と共に開催している。

広報活動としては、ホームページやFacebook、ブログを通して情報発信するほか、今年で100号になる最新の展覧会情報などを掲載する会報『群暉（くき）』も年4回発行している。

この美術館の活動のすごさは、どの事業やイベントも開館から間もなく始まり 20 年以上続いていることだ。また、絵画教室やこども展の開催などによって年齢層の幅も広げ、ファンづくりにも成功している。スタッフや学芸員である岡部さんの活躍はもちろん、やはり「絵の町・岩内」の土壌があってこそだろう。

活動は、瀧澤進館長と常勤スタッフ 3 人、学芸員の岡部さんが中心となって行っているが、ボランティアの存在も欠かせない。ボランティアグループ「ポプラの会」は、美術館の活動を側面からお手伝いしようと 1997 年の 4 月に結成。現在は 15 人おり、展示室の監視や『群暉』の編集にも携わっている。また、全国に 80 人いる「友の会」というファンクラブもあり、年会費 3 千円で、1 年の有効期間中は観覧が優待となるほか、『群暉』の送付や各催しの案内もされる。

### ■ 2019 年は観覧者増

絵が増えてきたため増築して収蔵スペースを広げたい希望もあったが、人口が最盛期の半分の 1 万 2 千人となり、岩内町自体の税収も落ちて財政的に厳しく建物を維持するだけで精一杯なのが現状だ。会報やチラシを季節ごとではなく、まとめて会員に送り送料を削減するなど苦心している。

ただ、2019 年は観覧者が 2018 年と比べて 2、3 割増えて好調だ。これは、高速道路の余市延伸や海外からの観光客が増えたことと、『生まれ出づる悩み』出版 100 年を記念し、2018 年に「有島武郎と木田金次郎」展を東京、札幌、ニセコ、岩内で開催したことの影響もある。特に有島武郎が眠る多摩霊園がある東京都の府中市美術館での開催は、39 年ぶりの東京での木田金次郎展とあって、会期中約 9 千 5 百人の入館者があったほど人気を博し、若い世代のファンも増やした。この好調さを維持したいところだ。

「木田作品を通して過去から現在までの岩内の人や歴史を次の世代である子供たちに伝えていきたい」と岡部さん。「絵の町・岩内」だからこそ生まれたのが「木田金次郎美術館」であり、そして美術館を通じた木田の系譜はこれからも連綿と受け継がれていくことだろう。

### ■ 連絡先

〒045-0003 岩内町万代 51-3

NPO 法人 岩内美術振興協会  
理事長・館長  
瀧澤 進（たきざわ すすむ）

TEL : 0135-63-2221

FAX : 0135-63-2288

Email : kidabi1@khaki.plala.or.jp

URL : <http://www.kidakinjiro.com/npo.html>